



Title	身体が言葉を失った時：非言語的なやり取りから生まれる身体の意味について
Author(s)	玉地, 雅浩
Citation	医療・生命と倫理・社会. 2010, 9, p. 66-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

身体が言葉を失った時

——非言語的なやり取りから生まれる身体の意味について——

玉地雅浩

(藍野大学准教授、理学療法学・臨床哲学)

0. 嘘の身体

医療や福祉の現場で言葉を失った人と接する時、言葉が無くても表情や身振り、他の伝達手段やいざとなれば雰囲気で分かるだろうとよく言われる。しかし言葉を介した、あるいは身振りや表情などいわゆる非言語的なやり取りを行うことができないと、その場と一緒に居続けることが難しくなる。また何かを行うということが困難になることがある。

そこで、話しかけながら相手に触れなさい。言葉でのやり取りができなければ、あるいは言葉が通じなければボティランゲージで身振り手振りや表情といった非言語的なやり取りで大丈夫、いざとなったら気合いや誠意さえあれば相手と気持ちを通じ合わせることができる、としばしば言われる。しかし、脳卒中後遺症などによって言葉を発する機能が変化した人と一緒に運動する場面では、言葉のやり取りがないがゆえに非常にぎこちないやり取りになることを経験する。

最初がいいがその後が続かない。やり取りが続かないので話しかけるのがばからしくなるのでもない。相手から一切応答がないために、一人で話していることがむなしくなるだけでもない。必死に身振り手振りでやり取りを試みているのに、上手く相手に意図が伝わらないことに腹立たしくなるのでもない。しかし言葉を発することをやめ言語以外の他の手段に注意を向けて、表情や身振りからでもやり取りをして相手の意図を読み取ろうとしなくなる。

私たちは言葉でやり取りすることに慣れすぎているので、言葉以外のやり取りから相手の意図や要求をつかみ取ろうとする態度に切り替えることは相当大変なことである。相手が話せないと分かり、あえて言葉ではなく身振りや手振り、あるいは目の動きや表情で自分の意志や感情や要求を相手に伝えようとする時、言葉を話している時とは異なる身体の使い方を要する。極端に眼を開いて驚きや拒否を示したり、喉をふるわせたり、腹からうなったり、突発的な音など言葉にならないあらゆる音を発しながら身振り手振りが段々と大きくなっていく。この時相手との間合いと関係なく音を連続して発しながら、普段の言語を使った会話では行わないような動き方が生まれてくるのである。つまり会話をしながら自然に生まれる目の動き、身振りやうなずき方、さらに呼吸のリズムや姿勢の変え方など、身体の使い方が普段とは異なるあり方をしてしまうのである。

このような非言語的なものを上手く使えないと言語で伝えることに非常に負担がかかる。例えば、文字盤でやり取りする場面を考えてみよう。眼球の動きを頼りに文字盤を使用する時、読み取る側は指示された文字を端に正確に読み取っているだけのように感じてしまう。言葉による文章としては伝わるが、時間がかかるため急いでいる時には相手の言

言葉を途中でさえぎってしまうことがある。その上に文章がどのような抑揚や速さで、あるいは声の大きさや声色などで語られるべきものなのか、その文章が語られる文脈や状況が伝わりにくいために相手の様子を掴みにくいのである。

高い言葉を出すときに自然と背筋が伸びアゴが少し上がる、必死に伝えようとして身体を前に傾ける、言葉が追いつかず手を身体の前で相手の方向へグルグルと回転させリズムを作ろうとする。出てこない言葉を身振りだけでももう直ぐ出てくることを表そうとする。文字盤を使って言葉のやり取りを行う場合には二人とも文字盤の方向に向くため、相手がどのような表情や身振りをしているかを横目で見ることになる。言葉を話すという行為は言葉以外のやり取りを伴いながら、誰かに向かった運動性を伴うものであるということを実感させる場面に出会いにくくなってしまう。一方、透明の文字盤を向かい合って使用する場合には、お互い相手の表情や身振りを感知しやすい。同時に強い意図や信念を持って向かってきているというように、その運動性を感じながら相手の態度に向かい合うことができる。それゆえ、文字盤上の字だけを確認する場合と比較して、逐一正確に相手の言葉を確認するようなやり取りは減ってくる。多少は字を読み飛ばすこともあるが、読み上げた字を声に出したりしながら相手とのやり取りを楽しむことができるのである。

言葉だけで相手に自分の意図や要求や感情を伝えるのは難しい。何より字だけを正確に読み取ろうとする態度の時、言葉から伝わる以外のものがいかに抜け落ちているかを実感することは多い。相手とのやり取りの中で自然と変化する言葉の強弱や速さや音色に合わせて姿勢や身振りが生まれるからである。しかしその一方で、やり取りの中で言葉を用いずに姿勢の変化から、あるいは仕草やジェスチャーでだけで自分の意図を相手に伝えようとするのは相当大変なことである。腕を眼の前にあるペットボトルのある方向へ伸ばす運動一つとりあげても、ペットボトルを取ろうとしているのか、偶然腕を伸ばしただけなのかは腕を伸ばした人に聞かないと分からない。言葉でのやり取りが出来ないために、動きから相手の意図や欲求を類推しようとしても、その動きから導かれた判断が相手の意図や欲求と一致しているかどうかを言語以外のやり取りだけで確かめることは難しい。もちろん赤いバラを見てそれぞれが赤いバラだと判断しても、その赤さが同一かどうかを確かめる方法は厳密にはありえない。

本小論では、医療や福祉の現場で用いられる言葉、表情や身振りやジェスチャーでのやり取りというものがどのような意味を持っているのか、この点について考えてみたい。日頃実践されている医療・福祉従事者と言葉を発することができない人とのやり取りにおいて、そのさまざまな在り方がどのような意味があるのか、これらのことを吟味することにより、医療や福祉の現場で言葉やそれ以外の手段を用いてなされるやり取りの意味や限界を明らかにしていきたい。

1. 視線の動き

相手の意図を推し量ろうとするとき、反対に相手に自分の意図を伝えようとする時に私たちは意図的にあるいは自然に眼球の動きが変化する。そしてこの眼球の動きに私たちは非常に敏感である。相手が視線をおとせば提案した意見を暗に拒否しているというように消極的な態度を感じとることができるのである。また視線が外れる様子を見て相手が何か

思案しているのか、少し間を起きたいのかということなどが分かる。

このような視線が持つ働きの意味を利用して、人間の認知機能を研究することもできる。ロボット研究者の石黒浩は人とそっくりなアンドロイドや人の姿には似ていないロボットに出会った時の視線の動かし方や振る舞い方を、人を相手にしたやり取りの場合と比較している。姿が人間に似ていないロボットと比較して、外見が人間にそっくりなアンドロイドに出会った時には人間と向かい合った時のような眼球の動き方になることを明らかにした。そしてロボットとアンドロイドに出会った時の眼球の動かし方の違いは、アンドロイドに対しては人間に向かい合った時のように、相手の感情や意図を探るような眼球の動き方になるのだ¹としている。石黒は視線の動きが持つ意味を以下のようにまとめている。

「人間の視線は意識的に動かすことができるだけでなく、脳の無意識の活動によっても動かされる。この無意識の視線の動きを説明する理論は主に三つある。ひとつめは、思考中は周りからの刺激を減らし、考えることに集中するために視線をそらそうとする **Arousal reduction** 理論、二つめは、思考時は思考の種類によって脳の活動部位が変わり、視線の方向も変化するとする **Differential cortical activation** 理論、三つめは、視線は社会的信号であり、人は考えているということを他人に知らせるために対話者から視線をそらすとする **Social signal** 理論である」²。

このような役割をしている視線であるがゆえに動かないと相手が何に関心があるのか、どのように気持ちが変わっているかを判断することが難しくなる。患者や利用者の視線が動かない上に表情の変化が乏しければ感情の有無、そして変化を感じ取りにくくとても不安になることがある。視線が動かなくても自分や周囲を見ているということを感じることができれば、しばらくその場に居ることにそれほど努力を要しない。ところが目の前に居る自分や周囲の様子を見ていると感ぜない視線にさらされることがある。このような視線に出会ったことが無い人には想像しにくいかもしれないが、自分に関心が向かってきていないように感じる眼である。意図を持っていないとしか言いようの無い眼なのである。瞬きや視線の動きがないために相手の意図や欲求を読み取ることができないだけでなく、あたかも私がそこにいなかのように見開いている眼のように感じるのである。そのため自分の存在も否定されているようで居心地が悪くなってしまう。たとえ動かない視線であっても何かを見ていると感ぜられる眼もあれば、何も見ていない眼だということもある。同じ動かない視線であっても感ぜ方に差が生じることは不思議である。瞬きや視線の動きだけから相手が何を見ているのか、関心の有無が伝わるのではないのであろう。

それでも相手の人が視線を向けた先に自然と私たちは視線を向けてしまう。多くの人が一斉に視線を向けていればそちらに何か面白いことや得をするものがあることが多い。反対に危険なものであれば一瞬視線を向けたかと思うと人々は逃げ始めてしまう。もはやそちらをじっくりと確認する暇はなく、まずは逃げ出すのである。このように何かを見ていると感ぜる視線の方向は重要である。「目は人間にとって2通りの意味で重要なものである。自分が何かを見るということももちろん大切だが、他人がどこを、何を見ているかを知ること非常に大切だ。それを知ること、その人が自分に注意を向けているかどうかともわかるし、その人が何を考えているのかも推測することもできる」³。

仮に目が合った時には相手は友好的か敵対しているか、自分に危害を及ぼさないかと判断しながら、視線を外すタイミングを計る。このように他者の視線から私たちにどのよう

な態度で臨もうとしているか推測しながら、お互いの関係をどのように作っていくかそのあり方を生み出していくきっかけとなる。

2. 表情と出会う

先のロボット研究者の石黒はアンドロイドを用いた研究から、人の顔にそっくりなロボットと全く似せていない顔のロボットに出会った時、明らかに人の顔に近いロボットと相対した場合には人と出会った時と非常に近い視線の動かし方をする⁴と報告している。この実験から分かったことは「人間は人間とそれ以外のものを区別する強力な能力を備えている」⁵ということだ。人かそうでないかを一瞬のうちに捉え、既に視線の動かし方が変わっているのである。

このような人間の特性を利用して商品が開発されることもある。交通事故を減らす目的でバイクにいち早く注目させるために、ライトの角度やパーツの全体的な配置を工夫して人間の顔に似せたホンダのASV-3というバイクがある。フロントのデザインを怒った人の顔に似せることで、いち早く通行人に発見されることを目的としている。街中を漠然と走っていてもこんなバイクが向こうから走ってくると思わず注意を向けてしまう。人の注意を引いて事故を防ぐ。それは人が他者の顔に非常に敏感であるという性質を利用している。

ここで注意しなければならないのは、このバイクのフロントの部品の配置、すなわちヘッドライトやウィンカーの位置関係が、その配置の関係や構成が人間の顔に似ているデザインだから、通行している人がバイクのフロントを人間の顔に見立て、その顔が接近してくるから注意を向ける。あるいは向けやすいようにしているだけではないのである。むしろ人間の顔のようなものが向こうからやってくる、勢いよく自分に向かってくるから危害が加えられるかもしれない、それゆえ注意しなければならない。このような自分にとっての意味、異なる表現を用いればその人間的な意味を含みながらバイクと出会うなかでこそ、そのフロントの部品の配置や構成は意味を持ってくるのである。

その物が私たちにとって危険を及ぼす可能性がある、そこまでいかなくても注意を払う必要があるものであれば、物であっても生き物のように接する場合がある。そして、このように人間にとっての意味に応じて、物か人間かに関わらず、視線をどの方向にどの位のスピードで動かすか、視線を動かす方向をいつ切り替えるかというように、視線の動き方が変化するのである。

3. 表情が生まれる時

バイクのフロントに意味のある表情を浮かび上がらせてしまう。他にも飼っている犬や猫がお腹をすかしたとき、飼い主にとってはなんとも言えない可愛い顔をしているように感じる。勝手にこちらがペットの表情を読み取るのだが、それは犬や猫にとって生きていく上での戦略であるとも言われている。このような事態はペットと出会った時だけでなく、アンドロイドに対しても見られる事態だと先の石黒は報告する。アンドロイドの立ち位置や姿勢や動き方によって、見ている人はアンドロイドが感情や意図を持って行動しているように見えると言うのである。「感情を生成するメカニズムがロボットに実装されていなく

でも、十分に感情を持っていると感じる、いわゆる主観的な現象であり、ロボットは感情のメカニズムを持たなくても、十分に感情を持っていると人に思わせることができる」⁶としている。

私たちが嬉しさや悲しさのように感情と呼ぶものをアンドロイドが生み出さなくても（そのような機能を工学技術で生み出せることができるのかという問題があるが）、私たちはアンドロイドが感情を持っているように見なすと述べているのである。アンドロイドが姿勢や身振りなど動き方や立ち位置など状況に応じて変化する様子を見ると、私たちは感情と呼んでいるものをアンドロイドから感じてしまうということである。つまりペットやアンドロイドと出会った時にも私たちは視線の動きや姿勢の変化を含めた身体の動きから感情を勝手に読みこんでしまう。だからこそ、表情は現れてくると表現した方が正確な事態なのである。私たちは他者の動きや表情を単なる観察物としてみることは難しいのである。

出会ったものが醸し出す意味との関係は強固なものであり、その意味に基づかない表情の読み取りは不可能である。このような事態を哲学者のメルロ＝ポンティは卓抜な表現で表わしている。以下のような文章が参考になるだろう。

「私たちは目や髪の色を知らず、口や顔の形を知らなくても、完全に表情を認めうるという事実は、文字通りに受けとられるべきであろう。それらのいわゆる要素は、表情に寄与するかぎりにおいてしか現前しないのであり、そしてそれらが記憶のなかにどうにか再構成されるのも、その表情からなのである。セザンヌの言葉によれば、私たちは画家——或る種の画家——に教えられて初めて、人の顔をも石と同じようなものとして眺めうる。人間的な意味のほうが、いわゆる感覚的記号よりも、先に与えられているわけである」⁷と述べている。

顔の輪郭、眉や口の端が上がっているか下がっているか、頬の筋肉が緩んでいるか緊張しているか、つまり、その人が喜んでいるのか怒っているのか、悲しんでいるのか楽しんでいるのかをこのような表情を構成している幾つの特徴から、その表情の意味を構成し判断する、あるいは感じているのではないということを述べているのである。相手の状態が自分にどのような影響があるか、どのような関係を結ぶことになるか、そのことを思い浮かべつつ判断する前に、一つ一つの表情を構成するものやその特徴をチェックするわけではないのである。

ペットやアンドロイドと出会った時にもその表情に私たちはある感情を読み取ったように、人に出会った時には物を見るようにはその顔を見ることは出来ないと、メルロ＝ポンティが述べていた。相手の顔を見た時には頬が緩んでいる。口角が上がっている。目じりが下がっているなど視覚的に捉えることができるような感覚的記号よりも先に、人間的な意味が与えられている。ここでいう人間的な意味とは、相手の顔が持つ自分にとっての意味である。私たちに対してどのような態度で臨んでくるかという意味である。ある顔と出会った時、少し大げさな表現かもしれないが私たちに危害を加えようとしている、そんな抜き差しならない意味をも含んでいるものである。

嫌な眼にあわせようとしているのか、反対に一緒に喜びや楽しみを分かち合うとしている顔であるかということを私たちは捉えることができる。自分の身に危険が及ぶために直ぐにその場面から逃げ出すべきだというように、その状況を避けるべきか否かと判断し決

断する前に、既に相手との関わり方が自然と生まれている。このような関係性の中で初めて、相手の顔のその表情を構成する特徴も意味を持ってくるのである。このような出会ったものとの関係や関わり方を抜きにしたまま表情を見るということは困難なのである。引用した箇所では述べられているように、画家の眼を通さなければ私たちは他者の顔や身体を、その表情を物のように観ることは難しいのである。

4. 自分の内に位置を占める他者

医療や福祉の現場においては、患者や利用者が視線を動かすことができない、表情を変えることができない、言葉を話せないからというように、患者や利用者のさまざまな状態に応じてやり取りの手段を変える。しかし、医療・福祉従事者は患者や利用者の表情から勝手に感情を読み取ろうとしてしまう。相手の気持ち、希望や要望を推測しようとする態度を立ち上げ、その表情を勝手に読み取ってしまうという傾向が強くなってしまっている。それは表情を読み取ろうとせずとも既に医療・福祉従事者の身体が患者や利用者の身体に出会った時に起こっていることである。

患者や利用者に見いだす人間的な意味によって、視線の動きや口角の状態をどのように判断するか、その内容や結果が変化する。患者や利用者が医療・福祉従事者を信頼していない、あるいは希望や要望を訴えようとしている態度から生まれる表情だというような人間的な意味を捉えてしまうのである。患者や利用者がある場に臨んだ際に、視線や口角の動きがなぜそのように動くのかという人間的な意味を見いだそうとしなくとも、医療・福祉従事者は自ずと捉えてしまう。

だが、読み取ってしまったと覚えることによって医療や福祉の現場で働いている者が苦労している側面がある。一緒に働いている周りの人たちから独りよがりの解釈は避けるべきだと非難されるためである。相手の意図や思いを正確につかむためには話し言葉や文字盤を使用して言語によるやり取りが不可欠だと考えている医療・福祉従事者にとって、人間的な意味を捉えるということは不確かなものだと考えているからである。一方、人間的な意味を捉えていると思っている人たちも、相手の気持ちを読み取ろうとする、あるいは読み取ってしまう態度があまり過度になると独りよがりになってしまったと覚える。

いずれにしろ患者や利用者が言葉を発することが困難な場合や文字盤を使っても上手く要望や感情を伝えることができない場合、言葉でのやり取りに頼ることができない。そこでほんの僅かなまぶたの動きや呼吸の変化などから相手の意図や欲求を類推しようとしても、その変化から導かれた判断が相手の意図や欲求と一致しているかどうかを言語以外のやり取りだけで確かめることは難しい。

しかし患者や利用者の気持ちや希望に沿った治療やケアを提供する必要があると考えている者にとって、相手の感情を確かめられないまま、やり取りを続けることは困難である。医療・福祉従事者はやり取りを続けないと仕事が行いにくいのである。言葉を発するということは相手に向けて意図や要求などを伝えるだけではなく、自分を客観的に見つめるためにも必要なのであろう。この点について音楽家の武満徹は次のように述べている。

「語るということは、単なる発音行為とは異なる。言葉によって語る時にはかならず其処になんらかの形で対象が存在する。自分の内に他者が位置をしめる。そして、自分をさえ

対象化し、人間的な自我意識が表われてくる」⁸。このようなあり方は医療や福祉の現場における患者や利用者やその家族と、あるいはスタッフ間での会話にもあてはまるであろう。やり取りの様子を外から見れば、患者や利用者に向けて発せられているように見える発言であるが、しかし実は自分に向けられたのではないかという思いがある。医療・福祉従事者が発した言葉や振る舞いが患者や利用者の反応やそれこそやり取りを行っているその場の雰囲気を変えてしまう。このような他者の身体を含めたその場の状況を通して、自分の医療・福祉従事者としての態度や行為が適切であるか、その場にふさわしいかを確認しているのかもしれない。それはともすれば雑になる処置やぞんざいな対応を戒め、処置を確実に丁寧に安全に遂行するための一つのリズムを生み出し、お互いのやり取りを支えているのだろう。

ところで、先に引用した武満の文章の中で述べられていた「自分の内に位置を占める他者」とは、患者や利用者やその家族、医師や看護師など病院スタッフ、医療や福祉活動を営む上で関わってきた人たちだけを指しているのではない。患者や利用者やその家族とのやり取りに対する是非を判断する際に、これらの他者は全ての状況を踏まえて判断はしてくれない。医療や福祉の現場において相手に共感的な態度で臨もう、あるいは反対に今は少し厳しく接することが今後の治療計画や患者や利用者との関係を築く上で必要だということを総合的に判断しなければならない場合がある。その判断に妥当性があるかどうかを常に患者や利用者とのやり取りを通して確認してくれるメタ的な存在が、ここで言う「自分の内に位置を占める他者」である。患者や利用者とのさまざまなやり取りの状況において判断した結果を、その案件に関わった人たちと吟味することによって培われた経験があってはじめて可能となる存在である。自分の心の内を知りつつ、常に公平な判断を与えてくれる存在を想定しているのである。

実際の観察者たちの評価は、たまたま見かけた患者や利用者とのやり取りを見て判断するなど偶然によって影響を受ける。そこで医療・福祉従事者としての責任感や誠実性、あるいは義務感を養いつつ自分の中に公平な観察者(前述した自分の内に位置を占める他者)を想定し、その観察者からの非難を避けるような言動を取ろうとするのである。しかし言語を用いないやり取りができなくても人間的な意味を捉えることができているという思いや感じ方だけでは、どうしても相手の感情を確かめることなく関わっているように感じてしまい、自己の判断に基づいた行動を続けているような怖さを感じることになる。言語を介さないやり取りだけで相手との関係を築き上げていくことは、医療や福祉に携わる者にとって非常な困難が伴うのである。

5. 共に場を作るということ

独り言ではなく誰かに話しかける際には、その言葉が相手にどのように受け取られるか、あるいはどのような応答があるかを予想しながら話をしている。もしそのような前提がなければ言葉使いや話す内容や話し方に注意する必要はない。

相手に投げかけた言葉が相手の不安や緊張を緩める、あるいは反対に不安や心配を強めることはないかというように患者や利用者にとどのように影響するかを前もって考慮し判断しながら私たちは言葉を発している。相手と少し真剣なやり取りを行う場を作ろうとして

いる、リラックスした場面にするなど、どのような場を作ろうとしているのかによって患者や利用者に対する医療・福祉従事者の言葉かけや表情、仕草や姿勢なども含めた態度や接し方は変化する。相手の痛みにも共感的な態度で接することもあれば、医学的な処置について分かりやすく説明する、相手にとっては容易に受け入れがたい提案であるために説得するような態度で臨むこともあるだろう。患者や利用者と向かい合う際にどのような態度や雰囲気でも臨むかは、相手の状態や治療方針などの状況によって決められてしまう面がある。

しかしその一方で医療・福祉従事者の話し方や表情、さらには仕草や姿勢など相手への関わり方や調子を変えることによって、相手の状態やその場の状況を変化させることもできる。患者や利用者にもどのような態度や雰囲気でも臨もうとしているのかによって、相手との向かい合い方を変化させることによって医療・福祉従事者からも新たな状況や状態を作ることができるのである。

ところが患者や利用者から言葉での返答や表情や視線の動きを感じられないために、新たな状況や状態を上手く作ることができない場合がある。この時、医療・福祉従事者が相手からの応答を期待していない、あるいは反応が無いということを前提にした応じ方をすると、患者や利用者とのやり取りが直ぐに途切れてしまう。そこで相手からの応答が困難なのであれば、まずは医療・福祉従事者の方から表情や視線の変化を伴いながら言葉を投げかけてみる。患者や利用者の状態に応じた普段の関わり方とは異なった、新しいやり取りのあり方を作ってみることが必要となる。

表情が読み取れないなら自分の表情や言葉の投げかけ方を変化させてみる。このことによって相手の呼吸が深くなったり速くなったりと何らかの変化が生まれることを期待しているのである。またあえて投げかけ方を変化させることは、患者や利用者の変化が起こる可能性のある場所以外にも医療・福祉従事者が注意を向けるきっかけとなる。いつも同じ場所に変化が現われるわけではないので、身体全体に注意を向ける必要があると思っても、つついと同じ所に眼が吸い寄せられてしまう。あるいは変化の内容が違ったあり方で生じてくるだろうという思いを持って相手と向かい合っても、知らず知らずのうちに予断をもって接してしまっている。そんな医療・福祉従事者の態度を防ぐきっかけになるのである。それゆえ前節の言葉で表現すれば、まずは相手への意図や欲求を持って医療・福祉従事者は目の前の人に話しかけることが重要なのである。患者や利用者にもどのように接したいか、どのような関係を作りたいかというような思いがあってはじめて、姿勢や話しかけ方など医療・福祉従事者からも態度を変化させることができるのである。

しかし実際には、患者や利用者から言葉での応答がない場合、医療・福祉従事者は相手の表情や顔色、息遣いや緊張感など、どんな微細な変化も見逃さないように注意することになる。この場合には極力声かけを少なくして、目や耳をそばだてて体全体で相手の変化を捉えようとする。ところが私たちは言葉でやり取りすることに慣れすぎているので、仕草、ジェスチャーだけでやり取りするのは相当大変なことなのである。相手の変化を捉えようとすればするほど、相手の振る舞いや表情に意図や欲求や要望を勝手に読み取ってしまう。少しの変化に何とか意味を見いだそうとしてしまい、患者や利用者の何気ない動きや変化を無視することができなくなってしまうのである。

どのように接したらいいか決断できず途方にくれ、やり取りを続けることができない時

がある。そこで何とかやり取りの手かかりを掴もうと、患者や利用者が言葉を話せないから困っているだろう、医療・福祉従事者は笑顔で優しく接することを優先すべきだと判断した際の態度から生まれる応じ方は常に適切だとは限らない。ただひたすら笑顔で優しい身振りを伴いながらのやり取りを常に行おうとすることは、このような患者や利用者と共に作り上げていく場にふさわしくない場合がある。なぜなら相手の変化によって自分に生じた変化を感じ、それをさらに相手とのやり取りに反映させられなくなるからである。このような状態になってくると患者や利用者に対する応じ方は画一的になってくる。つまり他者を介した自分の思いや状態にも気付くことが難しくなるのである。本来、医療・福祉従事者は今何を優先するか、患者や利用者とのどのような場や関係を作っていくかによって相手への態度が決まり、応じ方が生まれてくるべきなのである。

言葉を発しにくい相手の言葉を正確に聴き取れる。相手に対して正確に応答できる。言葉を発することができない人に対して必要があればこちらから情報を提供し、話題を変えながら関心を引くことができる。このように相手が求めているものにきちんと答えられることは、医療・福祉従事者にとって重要なことである。しかし、このような働きが可能になるだけでは患者や利用者と長く話すことや、その場に長く居続けることはできない。時には、医療・福祉従事者はその場から去るというような振る舞いも求められるのである。

6. モードが変化する時

特定の個人に対して、あるいは大勢の人に向かって話しかけることがある。たとえ目の前に誰かがいなくても、ある人を思い浮かべながら語りかけることがある。いずれにしろ、自分が話した内容がその話し方、語りかけ方によってさまざまな反応を引き起こし、その場が変化することを意識する。仮に話している本人は意識していないにも関わらず、話し方に影響を与える。例えば、独り言や普段の生活における何気ない会話や挨拶をするだけの時と、特定のテーマについて対話を行うために時間と場所を決めて集まる場合、お互いの利益を求めつつ妥協点を探す交渉など、他者との関わり方によって口調や声の大きさなど話し方や内容を含めた立ち居振る舞いが変わる。異なる表現を用いれば、モードが変化することも考慮しなければならない。そもそもモードが変化させることができるのは他者の視点に立って、あるいは他者を通して自分の立場や状況を考えることができるからであろう。

おなじ「こら」でも本当に怒っているときや許せないときは短く、大きく、低い野太い声で発するだろうし、子どもなどに注意を促しつつ少し脅かすために「止めなさい」と言うようなニュアンスで発する場合は、声色は少し強めにしても声を長く伸ばし、表情も先ほどの場面とは異なるだろう。前者が相手に比較的一方的に投げかけているのに対して、後者は発した後の相手の振る舞いの変化を待ちそこまでの関係を含みこんだ発し方になっている。

このように同じ言葉でもその発し方によって相手の応じ方は変化するが、そもそもそれは私たちの態度や話し方など接し方によって相手がどのような応じ方をするか、その反応までを含んで考慮し、その場の状況を作ろうとしているからである。それゆえ作ろうとしている場にふさわしくない、あるいは期待していたものと異なる反応が返ってくると、次

にどのような場を作るか考えないといけなくなる。単にやり取りのテンポやリズムが崩れ、むなしくなるというのではない。

少しややこしい話ではあるが、自分が話した内容が相手の人（たち）にどのような影響を与え、それがあある雰囲気をかもし出し場の形成のされ方が異なることを踏まえて、接し方や話し方など相手への態度を変化させているのである。つまり生み出される、あるいは生み出そうとするモードに応じた話し方やそれに応じた所作を伴いながら応じていくのである。それゆえ少しこわもての人が予想もしない可愛らしい声で丁寧な話し方をされたとき、その見た目とのギャップに調子が狂うだけでなく、そもそもこれから作ろうとしている対話の場、モードにふさわしくない話し方をされたため、改めてその場を作り直さないといけないために面食らってしまうのである。

7. やり取りにリズムを見いだす

相手に投げかけた言葉がどのように相手に影響するか、相手とどのような場を作ろうとしているのかによって、話し方や表情や仕草や姿勢など、相手への関わり方や調子を変える。高い声を出すときは少し顎を上に向け、反対に低い声の場合には少し顎を引いて発声する。特に高い声を出さないといけないうのに上手く出ない時は、自然と背中が伸びて顎を上げやすくする。それでも足りない場合はさらに背伸びした姿勢になる。声の高さや大きさや調子など音色に関わるものが、姿勢や運動と連動しているのである。

姿勢の変化が声の大きさや調子を変化させるが、発した言葉を聞きつつ自分の運動感覚の変化を捉える。そのあり方が今作ろうとしている場にふさわしいものであるか注意深く判断することになる。また相手の反応に応じて自然と変化するものもある。声に出して話をする際に身体を揺すったり手の動きを伴うことがある。相手の話を聞きながらテンポよくうなずき拍子をとるような動きは、お互いのやり取りの中で変化する。話のやり取りのタイミングに合わせて話すスピードや文章の区切り方、声量や高低を変化させ声色を使い分ける。その際に身体はさまざまな姿勢や動きを伴う。また歌を歌う際にもリズムは深く関与しているが、一定の間隔で拍をとるだけの状態はリズムとは異なる。

例えば、リズムについて哲学者の村上靖彦は次のように述べている。「リズムこそが、声の次元において間主観性を支えているのであるから、リズムがつかめないとまぐ他者と意志の疎通が行えない。つまりリズムは個人の情動性と運動感覚の図式化であるだけでなく、そもそも複数の人間のあいだで運動感覚と情動性の間合いを図式化するのである。図式化はそもそも間身体的なものである。リズムに基づけられないかぎり、言語はコミュニケーションの手段となりえない」⁹。

言語的な意味においてどこで文章を区切るか、それに併せて身体の動きを伴ったり呼吸のリズムが変化する。またその身体の動きを伴った感覚やそれに伴う情感に基づけられながら作動するものである。それゆえ相手が棒読みで発声するとその内容が取りにくい。リズムにおいて感情や情動や運動感覚が浸透し立ち現れてくるのである。つまりリズムにおいてからだの姿勢や動き、表情や声の一連の変化がある意味を、私たちにとって感情や情動を喚起するようなまとまりを形成するのである。

表情や身振り、発話行為という具体的なもののなかに私たちが見いだすリズムとは、こ

のような話し方は相手が怒っている確率が高いというような法則や相手の気持ちを類推するための手助けとなるようなリストを照合しながら抽出されるものではない。それを見いだすことそのものが、常にすでに（識別・判断・行為としての）実践の一部をなしている。あるリズムを見いだす中で、姿勢や動きや表情、声や言葉にならない音の一連の変化がある意味を、私たちにとって感情や情動や身体的展開を喚起するようなまとまりを形成するのである。

別の表現をすれば、リズムを通して声の高低、テンポ、強度といったものが、言葉の羅列である文章において意味のある一群の言葉をまとめあげるだけでなく、その文章が述定、推量、疑問のいずれであるのかが伝わる。これは運動における身体の質においても同様である。怒っている時にはそのような抑揚や声の大きさ、スピードの緩急など怒りを表している言葉の区切り方がある。そして声色までを含めた声の使い方が、真っ赤になった表情や大きく見開いた目、さらには握りしめたこぶしや全身を震わせた様子と合わさって怒りを表現しているのである。

このような相手の様子は単に視覚的に捉えられるのではない。他の感覚も動因しリズムを見い出しながら相手の状態を捉えている。こうしたリズムを通して私たちの中にも喚起されてくる感情や情動に伴った視線や表情、あるいは姿勢の変化や動きが生まれてくる。このような変化が私たちの身体に起こっていることを感じられるが、それは相手に見いだしたリズムとの往還の中で可能となるものである。だからこそ相手の身体は私たちの身体とは異なるが、自分の身体に起こっていることのように直截に感じるができるのである。それはまた相手に起こっていることを自分のように捉えながらも、相手の身体を通して自分の様子を見ていることにもなる。

相手が感じていることを直截に、ここでは自分が怒っているように感じるができる。相手の応じた方に対応した自分の状態が、相手にどのような印象を与えるかを考慮し判断するまでもなく、態度を変化させることができる。このような働きがあるからこそ患者や利用者と医療・福祉従事者の身体は別々にありつつも不可分であるような入れ子状の関係を作ることが出来るのである。そして今自分が発した言葉だけから、ここにいる私からだけ見る。このような「今」、「ここから」だけの視点に縛られない見方ができるのである。

8. 大げさな身体

相手が言葉話すことができない、あるいは話しにくいと分かった時、言葉を理解しにくいようだと判断した時、相手に対して言葉だけで伝えようとするのをやめ眼の動きや表情の変化、身振り手振り、姿勢を変えながら自分の意図や要求を伝えようとする。それは相手への応じ方を変化させようとする際に自然と生み出される。自分ではどのような動きが生み出されているか自覚できないような無意識の動きを含めて、相手に自分の希望や感情を伝えようとするのである。

これまで見てきたように相手の話に興味がある時には思わず身を乗り出す、うなづくタイミングが早くなるといったように相手の話を待ちきれなくなる。他にも視線の使い方や表情が相手の話に興味があることを示すように意識して変化させていることもある。反対に自分では意識しようと思っていなくても自然と変化している使い方がある。しかし伝達

の在り方において自分で変化させようと思っているものの割合が大きくなると、かえって相手に伝わりにくくなることもある。言語以外の手段で伝達しよう、気持ちを込めて誠実に伝えよう、そう決心した途端に身体は不自由になる。普段はしない動き方や大げさな動きが生まれるからである。

メルロ＝ポンティがセザンヌの言葉を引きながら、画家の眼を通してしか私たちは人の顔を石のように見ることは出来ないと述べていたことについては前述した。表情はそれが自分にとってどのような意味があるか、自分にとって有益であるか危害を加えるような感情を持っているのか、どのように接しようとしているのかというその意味に誠実に触れることから始める必要がある。なぜなら、その上で表情を構成する眉や目じりの角度や形が、頬や口元の緊張など表情を構成するものの意味が決まってくるからである。それゆえ相手の表情の微細な変化に着目しようとすることは、相手の状態を捉える上で一番に優先されることではない。

相手とどのような場を作ろうとしているか、状況を生み出そうかという態度があつてこそ、そのやり取りの中で言葉や非言語的なやり取りが生まれてくる。それは相手とこれからどのような関係を作ろうとしているか、そして既に出会ったことによって作られつつある関係においては、相手に投げかけたものがどのような影響を与えるかを考慮しなければならない。これまで何度も確認してきたように、このようなお互いが作ろうとしている関係性の中から生まれてくる言葉や非言語的なあり方がまずある。さらにその場で生まれるやり取りを踏まえてその後の私たちのやり取りをどのように作っていこうかと考えている。

しかしこの時、相手とのやり取りを経ながら感じる相手の要望や感情を勝手に読み込み、自分の気持ちが勝手に盛り上がっていく可能性があることに注意しておきたい。私たちは相手の反応に応じて、あるいは反応を織り込んだ上で自分の接し方を変化させる。ところが患者や利用者への思い入れが強い場合や、ついつい感情移入してしまったために、共に作ろうとしているこの場の位置づけや解釈を、相手とのやり取りを踏まえずに進めていくことがある。

やり取りを支える視線や表情の変化、話し方や内容、立ち居振る舞いなど全てをコントロールしようとする、不自由な嘘をつく身体が現われるのである。違う表現をすれば相手が私たちからどのような人間的な意味を見いだしているかによって、自然に生まれてくるやり取りを再現しようとする、普段使わない言葉使いや内容になり、非言語的なやり取りにおいても普段とは違った身体の使い方をしてしまうのである。

大きく見開いた眼、顔のあらゆる筋肉を用いた話し方、ゆっくりと話す喋り方、このような身体を作りながら話している人はこのような接し方が、相手が分かりやすいだろうと判断し実践している。しかし、これらの所作は本来相手とのやり取りで作られるものとは異なっている。出来るだけ表情や身振りによって自分の要求や感情を伝えようとした場合、日常生活における会話で用いない身振り手振りが生まれ、言語で伝えようとするものと言語以外の手段で伝えようとするものが混在し、結局何を伝えようとしているのかが分からなくなる。言葉を用いながらの身振りとは異なるのである。

また筆談のように文字を中心としたやり取りにおいても、相手の状態を考慮しないままやり取りを始めたために上手く関係を作れないことがある。例えば、相手が漢字を理解する能力がそれほど低下していないにも関わらず、相手に分かりやすいだろうと漢字を用い

ない文章を筆談相手に一方的に提示することがある。この場合、ひらがなだけの文章と比較して漢字が混ざることによって文章の区切りや意味のまとまりが分かりやすい点を見逃している。文章を読む場合、句読点や漢字の存在によって文章の区切りや意味のまとまりを見いだすことができ、読みやすくなると共にその意味も了解しやすくなる。

相手とどのような状況を生み出そうかとしているかによって文章の抑揚や区切りが決定される。ところが、これまで確認してきたように言語的なもの非言語的な表現に関わらず、相手がどのようなやり取りが一番行いやすいかを考えないまま文章の抑揚や区切りが一方的に決められてしまっている事態があることにまずは気付くことが重要である。

9. 動くままにやり取りを続ける

会話をしている、うなづくタイミングが極端に合わない場合、肩で呼吸する動きや微妙な頭の動きなどがない場合、徐々に人間と話している感じがなくなってくる。あるいは相手にとって私たちは存在しないかのように接しているのではないかと感じてくる。この時、言葉や眼の使い方や表情、身振りや手振りなど身体的な動きを伴った、他者からも視覚的に確認できるものだけから相手の考えや希望を類推し判断することは避けた方がいい。相手に話しかける際に私たちは非言語的な関わりとして、自然と相手との距離や姿勢を変化させる。ただ相手に触れるという行為や関わりの際にも触る場所や触れ方を変化させることができる。このような関わり方自体が相手とどのような関係を作ろうとしているのか、あるいはどのような状況や場を作ろうとしているのかを自然に表わしている。

他者を巻き込み場を作る、あるいは本人が何か伝えたいと思わすような場を作る。このように相手とどのような関係を作るかによって触れる場所や触れかたを変化させるのは何も人相手だけではない。物との関係を作る際にもその人の物との関係から生まれる身体表現がある。例えば車椅子から何とか自分一人でベッドに移ることができる人が動きにくい身体を必死に動かし車椅子を操作する。自分が移りやすいように車椅子とベッドの距離や角度を調整し、立って方向転換する上で動きにくい脚が最良の位置になるように何度も試行錯誤する姿を見ることがある。

この姿は自分がベッドに移ることができることを分かっており、かつ移りたいと思っているからこそ生まれるものである。そして、ベッドが部屋のどこに配置されているか、あるいはベッドの周囲に置かれている物など環境との関係を含めて生まれてくる姿勢や動きなのである。このような動きを見て、ベッドに移りたいのかどうか言葉で聞くことは相手の意図を確認している行為にも思える。しかし、言葉で伝えることはできないがその人の姿勢や動き方、立ち居振る舞いがベッドに移りたいと思っていることを既に意味し表わしているだろう。そのような時に言葉で事の真偽や意図を確かめることにこだわると相手とのやり取りのリズムを壊してしまう。相手の意図や感情を直截に自分のことのように感じられなくなってしまうのである。

相手が置かれている場面から生まれるその人の身体各部の姿勢や動き方の変化、それは本人も全てを把握しているわけではない。本人が一つ一つ言葉で説明できない変化を伴いながら私たちは普段動いている。ところが相手の人が言葉を発しにくい、動きにくいとなると途端に医療・福祉従事者はその動きを邪魔しているもの、原因となるものを探したり

本人に確認したりする。しかし、それは自分でも捉えることができないものを含んだ周囲との関係性から生まれる身体表現である。それを言葉や視覚的なものだけで確認することには無理があり、かえって相手とのやり取りを壊してしまうのである。動き方やベッドとの位置関係を一つ一つ考えなくても自己の運動感覚や状態を踏まえつつ生まれている姿勢やベッドに移るための車椅子の位置がある。

その過程にある患者や利用者が「ベッドに移りたいのか」「移れるか」「大丈夫か」「車椅子はその位置でいいのか」「足を置く位置はそこでいいのか」など改めて問われると、既にベッドに移ろうと準備しつつある流れを医療・福祉従事者が止めてしまうことになる。一つ一つ相手の気持ちや意図を確認することによってかえって患者や利用者と物の関係、そこに私たちも含みこまれた関係や作りつつあるその場の状況が変化してしまい、患者や利用者が動作を遂行することを邪魔してしまうかもしれないのである。言葉でのみ確認しては患者や利用者とのやり取りが、そして患者や利用者と周囲の物とのやり取りが、かえって崩れてしまうのである。

10. やり取りの全てを把握することはできない

言葉でのやり取りによって患者や利用者の感じていることを確認できないとき、相手の徴候を視覚的に捉えるだけでなく一緒に動くことによって、患者や利用者が困っていることを捉える必要がある。共に動作を行うその動きの中からでしか相手の戸惑いや恐怖感を感じ取れない場合がある。相手が行おうとしているその動きの中に入っていくことによって、はじめて動き方を修正する必要があるところに気付くことがあるためである。

姿勢の変化や動きの変化を伴いながら身体各部におこる微細な変化や徴候としての顔色の変化や指先の緊張、息遣いや振るえなど身体全体に現われるものもある。これらは動いている最中にも変化する。ベッドに移る前はそれほど怖いと思っていなかった患者や利用者が、いざ立とうとすると身体全体がこわばっていた、手が震えていた、その様子を自分で見て感じることによって、患者や利用者はそれまで自覚していなかった自分の感情や身体の状態に気付くことがある。このことによってベッドに移るという動作が自分にとって思いのほか難しいという意味を持ってくると、患者や利用者が描かれている状況やその場の雰囲気に変化してくる。ベッドまでの距離を長く感じる、あるいはベッドが実際よりも高く見えてくるのである。こうして患者や利用者の動作を遂行する能力に再び影響を与えることになる。

一人で車椅子からベッドに移ると転倒しそうだと判断した、あるいは移ることができないと感じた患者や利用者は医療・福祉従事者に言語・非言語的な手段でそのことを伝えようとしてくる。しかし、ここで医療・福祉従事者にとって注意しなければならないことがある。これまで言葉が使えない時、身振り手振りだけで意図や要望を伝えることは困難だと述べた。それは身振り手振りが言語的な伝達の役目を担えないというだけではない。やり取りに用いることができる伝達手段が少なくなってくると、例えば前述したように身振りや手振りに、ついつい注意を向け過ぎてしまうことになる。さらに患者や利用者の動きを視覚からだけで得ようというように特定の感覚からの情報に着目しすぎると、呼吸のリズムや顔色、触れるとすぐに変化していることが分かる筋肉の緊張など、患者や利用者の

身体に生じているさまざまな変化を捉える機会を医療・福祉従事者たちが自ら狭めてしまうことになる。本来ある感覚から得られた情報は他の感覚から得られる情報を持っている。それだけに、特定の感覚情報から得られた情報に執着し、その意味から離れられないと、生まれようとしているその場の(人間的な)意味と齟齬が生じるのである。

たとえ相手が言葉を話せなくても、身振り手振りが上手に行えなくても、眼球や表情の動きが乏しいからと必死に一方的に相手の徴候を繊細に捉えることだけに専念することは得策ではない。相手の変化から自動的に自分の態度や接し方の変化が生まれるのではなく、相手への関心や興味から生まれる態度や接し方がある。また治療を受ける側とそうでない側という力関係や利害関係によって生まれてきたやり取りがある。また治療する側だという役割意識しか持たない場合に生まれるやり取りがある。これらは自分が認識し意識・意図的に注意を向けることができるやり取りだけから生まれるものではない。

そもそも相手の表情や眼球の動きに意味を見いだすのは、自分が患者や利用者の微細な変化から相手の状態の変化を知る徴候として、また医療・福祉従事者として必要な処置や対応を行うためのきっかけとなるような意味を持っているためである。だからこそ相手から読み取ろうとするのであるが、その際自分からの問いかけや働きかけに、つまり自分の変化に鈍感になるのではなく、自分に起こった変化にも繊細になりその変化をも含みこんだものを踏まえつつ、相手への応対を生み出していくべきであろう。

しかし伝達の在り方において自分で変化させようと思っているものの割合が大きくなると、かえって相手に伝わりにくくなることもある。言語以外の手段で伝達しよう、気持ちを込めて誠実に伝えよう、そう決心した途端に身体は不自由になる。普段はしない動き方や大げさな動きが生まれるからである。その際自分の身体に生まれる感覚や知覚を全て把握し、意識して注意を向ける対象を変化させながら気を配り、そして意図的にやり取りを変えることは困難である。このような全てを把握できないものを含みこんでいるやり取りだからこそ、繊細に、かつ時には自分の内に位置を占める他者から見れば間違っていると思うようなやり取りを試みるべき時がある。

医療福祉の現場において間違ったやり取りはその瞬間に分かるものだけではない。やり取りを続けていく中でしか分からない間違った接し方を最初から恐れていると、あるいは患者や利用者への態度がこれしかないと思ってしまうと患者や利用者からの特定の情報に集中してしまい、私たちに起こっている変化を捉えられなくなるからである。患者や利用者の反応を医療・福祉従事者からだけを見つけ出すというような一方通行の見方になったその瞬間に、いかようにも可能であるはずのやり取りのあり方を選ぶことができなくなり、画一的な対応になってしまう。相手に見いだした人間的な意味に私たちは密接に結びついているために、今行われているやり取り意外の態度を考え実践することは難しいことである。さらに医療・福祉従事者として患者や利用者にはこのよう接すべきだ、あるいは接したいと思いが強いと相手とのやり取りに見いだすリズムが変化してしまう。つまり相手に見いだした人間的な意味やお互いが作ろうとしているやり取りのあり方に執着しすぎると、相手から生まれる表現をそのまま受け取ることが困難になる。その場のやり取りの流れにのっていくためにはこのやり取りのあり方しかないという態度から離れた捉え方が必要になるのである。

〈文献表〉

- 石黒浩 2007『アンドロイドサイエンス』、毎日コミュニケーションズ
メルロ＝ポンティ 1996『行動の構造』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房
村上靖彦 2008『自閉症の現象学』、勁草書房
武満徹 2008『エッセイ選一言葉の海へ』、小沼純一編、ちくま学芸文庫
トム・スタッフォード、マット・ウェッブ 2008『Mind Hacks—実験で知る脳と心のシステム』、夏目大訳、オライリー・ジャパン

〈注〉

- ¹ 石黒 2007: 243 頁。
- ² 石黒 2007: 242 頁。
- ³ スタッフォード／ウェッブ 2008:384 頁。
- ⁴ 石黒 2007: 243 頁。
- ⁵ 同書 243 頁。
- ⁶ 同書 186 頁。
- ⁷ メルロ＝ポンティ 1996:248 頁。
- ⁸ 武満 2008: 232 頁。
- ⁹ 村上 2008: 145 頁。